

小宮豊隆

漱石と画

漱石と画

明治四十五年五月二十七日、漱石は戸川秋骨に宛てて、「今日午前に至り、不図自画自讃試みたく相成、生れて始めて画をかき候」と書いている。

漱石は秋骨から、発句をかいてくれと頼まれていた。それも普通の発句ではなく、画讃の発句であった。のみならずその画讃の発句は、漱石の方で予め画の趣向を考え、それが下にかいてあるものと想像してかかなければならない、画讃の発句であった。画は、漱石の方でそう

言いさえすれば、誰か外の専門の人に頼んで、あとでその通り書いてもらおうというのである。漱石がどうしてもしてそんなむずかしい注文を引き受けたのかは、私にははつきり分からない。然し漱石はその為め、「是は一所不住の沙門にて候という前書の後へ、雪の夜や佐野にて食いし粟の飯という句を書き、其下へ自在に鍋の釣るしてある傍に行脚僧の笠を描く」という趣向を工夫し、下に画がかいてある積りになって、上の方にその讚を書きにかかった。然し是は、もともと無理な注文である。漱石がいろいろ苦心して書いてみたにも拘わらず、其所に到底自

分の氣に入るものが出末上がらなかつたのは、寧ろ当然の事であつた。それで漱石は、「実をいうとどうしても画と賛は同人が同時に書かなくてはならぬものかと存じられ候。然らば画の上へ賛をするのが順当に候。賛をかいて其下へ絵をかかせる事は古今に其例あるや否や存ぜざれど少くとも小生の場合には画家を雪隠詰にすると同様の意地の悪い仕業に相成候」と言つて、到頭秋骨にその事を断つてやつた。

それがどういふ風の吹き廻しか——或は、画と賛とは同一人が同時にかくべきものだという考えが、漱石を強

く刺激したものかも知れない——その翌日の午前になつて、漱石は「不図自画自讃」が試みたくなり、「生れて始めて画をか」く気になつたのである。

その画は勿論、どう鼻眞目に見ても、決して良い画という事は出来なかつた。公平に言えば、筆をただのたくらせただけのもので、もしそれに「絵は最明寺殿が後向になつてあるいている所と御承知被下度候。斜に出ているものは杖にて決して刀には無之。山妻は侍が帯剣の姿と間違候間念のため説明を加え置候。」という説明がついていなかつたら、何をかいたものか、恐らく誰でも、

見当をつけるのに苦しむような画であつた。ただ其所には、拙を覆おうとする所が、少しもない。拙くてもなんでも、天真爛漫である。もしこの画に何等かの取柄があるとすれば、それは正に其所にある。漱石もそれに気がついていたのであらう、「是はほんの記念として差上るもの故」決して表装をして床の間などへかけるような事はないでくれ、「装飾品としては其うち書画ともに上達の見込あれば」うまくなった時に、改めて立破なものを御覧に入れると、書き添えた。

然し巖密にいうと、実は是は漱石が「生れて始めて」

かいた画ではなかった。勿論絹や画箋紙の上に、墨で、筆をつかってかく画は、是が「生れて始めて」の画であった事は、确实である。然し、画一般という事を問題にすれば、その前に漱石は、明治三十六・七年の比に、相当熱心に、ワットマンの上に水彩画をかいている。是は恐らく橋口貢、その弟の橋口五葉、寺田寅彦などの刺激によるものに相違ないが、漱石は当時そういう人々と、頻に自作水彩画の絵葉書を交換した。それは今日でもちやんと保存されている。また当時漱石が、その中に水彩画をかいた、ポケット用のスケッチ・ブックも保存され

ている。

漱石は、例えば子規のように、巖密な「写生」の画をかかなかつた。後年の漱石は、必ずしもそうだとは言いつれぬが、然し当時の漱石は、その絵葉書に於いても、又そのスケッチ・ブックに於いても、物の形を精到に捉まえて、それを色彩で表現しようとするよりも、寧ろ自分の頭の中にあるヴィジョンに、先ず姿を与えたい、その為には形なぞどうだって構わないと、考えていたものらしく見える。——柳の樹の下に白い家鴨が三四羽遊んでいる。然しそれは柳だか家鴨だか、よく分からない。

それにも拘わらず、緑の色が豎に縞にすうすうと引かれて、いる下に、いくつかの白点がある色彩の世界は、何かしら是をかいいた人が、この世界に這入って、さぞ愉快な心持がしたに違いないと想像させる、特別な感じを持っている。海岸の、海の向うに島に見える、松の樹のある丘の上に、大きな丸い石が据えてある。その石の上に、丁度雪達摩の首のように、もう一つ小さな石が載っけてある。大きな石の胴中には、何か梵字のようなものがある。黒く彫り込んである。是に漱石は『わが墓』と題した。そうかと思うと、書架を四五段かいて、それに列べ

た本の背中を、紅だの黄だの茶だの藍だったので、無雑作に表現し、それに「You and I / Nobody by」と題した画もある。

然しこういう水彩画は、漱石が『猫』をかき『倫敦塔』をかき、段々創作に熱中するに従って、次第に漱石の頭の中から、その姿を消して行った。明治三十八年も三月以後になると、漱石が自作水彩画の絵葉書を人に送る事も、殆ど絶えてしまったのではないかと思われる。漱石は、創作の方が面白く、また創作の方が急がしく、到底水彩画なぞかいている余裕を、持つ事が出来なくなるの

である。漱石が、絹の上に「最明寺殿」をかいたのは、それから七年以上たつてからの事であつた。漱石は、自分が過去に水彩画をかいた事があるなどという事は、或は忘れてしまつていたのかも知れない。

然しこの「最明寺殿」がきつかけになつて、漱石は、その後時々、再び画をかき出した。勿論是は、漱石が本来画をかく事が好きであつたからには相違ないが、然し一つには漱石が、明治四十三年の八月に修善寺で胃潰瘍に倒れ、明治四十四年の八月に大阪で再びその為に倒れ、その後は少し烈しい活動をする、すぐ胃に故障が起る

ようになった為である。それでも漱石は、明治四十五年（大正元年）には、まだそれほど画に熱中しなかった。十一月十八日の津田青楓宛の手紙の中で、漱石は「今日縁側で水仙と小さな菊を丁寧にかきました。私は出来栄の如何より書いた事が愉快です。書いてしまえば今度は出来栄によって楽みが増減します。私は今度の画は破らずに置きました。此つぎ見て下さい」と言っているが、然しそれも十一月三十日から『行人』が書き出されたので、中止されなければならなかった。漱石が、本気に、夢中になって画をかき出したのは、その翌年、大正二年

からの事である。

漱石は『行人』を書いて年を越した。然もその『行人』がまだ完結しないうち、大正二年の三月末に、漱石は三度び胃潰瘍で倒れた。それでも漱石は、劇しい痛みが通過したあと、『行人』の事を気にして、四月二日、「まだ原稿を書く」と頭がふらふらし。立つと足がふらふらし。胸も時々痛むにも拘わらず、「是があとずつとつづく」とよう御座いますがあとが危険」だと気遣いながら、『行人』の続きを一回分書いた。然し事實は漱石が心配した通り、そのあとすぐ再びもつとひどい潰瘍がやって来て、

漱石は五月末まで床につき、従って『行人』は、一時中断されなければならぬ事になった。その病後、「床はとり放し起きたり寝たりの有様」で、徐ろに健康の回復するのを待っている間に、漱石は、再び画を採り上げるのである。そうして今度は漱石は、「もう画を切り上げよう切り上げようと思ひながらま「だ」書いてい」（六月十一日）ると言わなければならぬほど、「画に凝つて他事を閑却」してしまった。その熱度は、翌年、大正三年一杯は続いた。大正四年、大正五年には、その熱は多少低下したとも言えるが、然し同じように熱心にかき

続けられた。

大正二年十二月十一日、寺田寅彦宛の手紙の中で漱石は、「小生画をかくのと遊ぶのと運動するのとでいそがしく候 画も明日はやめようやめようと思いながら其明日がくると急に描きたくなり候まあ酒吞がバーの前を通るようなものと存候其癖うまいのはかけず飛んだ酔興に候」と言っている。大正三年四月十日、津田青楓宛ての手紙の中でも、「私もあなたと同じように何かやりかけて油がのる時分に止める都合になるのが残念です、画もいやになる迄かいて夫から又文学なり批評なりに移って

行きたいと思ひます小説ももう書き始めなければなりません、夫で画はやめました、」と言つてゐる。漱石の『心』は、大正三年四月二十日から八月十一日に亘つて新聞に連載された。然もその連載中の七月二十八日、森田月宛の手紙の中で漱石は、「早く小説を書いてしまつて外の事がしたいと思ひます」と言つてゐる。この「外の事」が画をかく事である事は、言うまでもない。大正四年七月十四日、大谷繞石宛の手紙の中にも、「小説も職業になると出来る丈早く書いてあとの時間を外の事に費やしたくなります」と書いてある。

漱石は、大正二年の七月末、油絵具を買って来て、撫子をかいたり、紫陽花をかいたり、暫らくの間は、油画をかいた。然し漱石には、自分が病臥した為に中断された、『行人』の続きを書く義務が残っていた。是は九月十六日から十一月十五日に亘って新聞に載せられた。それを機会に漱石は、油画をかく事はやめてしまったらしい。油画は、いろんな点で、漱石の性に合わなかったようである。漱石の油画の期間は、非常に短かった。その前も、その後も、漱石が最も興味を持ってかいたものは、南画である。

漱石は、大正二年十一月三十日門間春雄に宛てて、「あなたの覚えている画はまだありますがあれは上げられません。下手なひどい画ですから。長塚がはははと笑った意味はまずいものをよく臆面もなく懸けて置くという意味からです。私にはただあの趣丈が好なのです。それで記念のためまだ仕舞ってあります。画が御望みならひまな時に何かかいて上げますが私のは画というよりも寧ろ小供のいたずら見たようなものです。その小供の無慾さと天真が出れば甚だうれしいのですがただ小ぎたない所丈が小供で厭味は大人らしいから困ります。書でも画で

もかきなれないと一通りのものは出来ず。又書きなれると黒人くさくなつて厭なものです。従つてどうして好いか解りません。」と言つた。同じ十二月八日には、津田青楓に宛てて、「私は生涯に一枚でいいから人が見て難有い心持のする絵をかいて見たい山水でも動物でも花鳥でも構わない只崇高で難有い気持のする奴をかいて死にたいと思います」と書いた。今日の日本人にそういう画のかけるうつわもの器があるとするれば、それは恐らく水彩画や油画ではなくて、南画である。そう考えて漱石が、南画に打ち込めのでは、無論ないには違いないが、然し画は「下

手なひどい画で「もなんでも、ただその「趣」だけを愛しようとするならば、さしあたり人は、南画のようなものを採り上げる外に、別に仕様もないであろう。それだから漱石は、水彩画もかき、油画もかいては見たが、結局南画に落つく事になったのではないかと思われる。そうしてその南画をかく事が、漱石にとって、段々一つのネセシテイになって来るのである。

漱石は修善寺の大患以後、次第にその眼を人間の内奥に向けて、其所に潜んでいるさまざまの私を剔り出して来ようとする、傾向を帯びて来た。然し人間の中の私は、

追求すれば追求するほど、深い所にしかと根を下ろして
いて、一人の人間の一生では、到底掘り悉す事が出来そ
うにも思われぬ。そういう他人の私、自分の私——一
口に言えば、人間の業の深さの認識が、次第に漱石の心
を重くして、漱石の人生を生き苦しくした。勿論生き苦
しいからと言って、それは、そのままに棄てて置ける事
ではなかつた。又それをそのままに、棄てて置く、漱石
でもなかつた。それだから漱石は、爾後、その人間の業
の深さを剔出する事によって、人がその業を認識し、認
識する事によってその業から浄められる事に精進するよ

うな、小説計りを書いて行つた。漱石の爾後の小説は、人間の業に悩む者の道連れとなつた。然しその仕事は、仕事そのものの性質上、多くの場合、漱石を苦悩と悲哀の、重い密雲の中に閉さざるを得なかつた。その重い密雲の中から、漱石を引き出してくれるものが、漱石の画だつたのである。少くとも漱石は、自分の画を、そういうものとして、自分にとって、一つのネセシテイとしたのである。

画には、理窟がなかつた。その上漱石の画には、黒人の厭味が出て来る隙間がないほど、稚拙で、無分別で、

天真で、然もそれだけに、その間から漱石の魂だけが出て来て物を言うという所があつた。それだから漱石は、自分の画に信頼して、不愉快な自分を任せ切る事が出来た。漱石は、大正三年十一月二十五日、学習院の講演『私の個人主義』の中で、「私は愉快だから描いたのではない、不愉快だから描いたのだと云って私の心の状態を其男に説明して遺りました。世の中には愉快で凝としていられない結果を画にしたり、書にしたり、又は文にしたりする人がある通り、不愉快だから、どうかして好い心持になりたいと思つて、筆を執つて画なり文章なりを作

る人もあります。そうして不思議にも此二つの心的状態が結果に現われた所を見ると能く一致している場合が起るのです。」と言っているが、漱石の画の美しさは、

——漱石の画が、黒人から見れば、恐らく「下手なひどい画で」あるにも拘わらず、その「下手なひどいものの中から、どの黒人にも見る事の出来ない、高い気品が立ち昇っているのは、漱石が、そういう止むに止まれない心持から、捨て身になって、画の中に打ち込んで行った所から、自然に醸し出されたものであるに相違ない。漱石にとって、画をかく事は、かく事その事が楽しいの

である。従って画をかいていれば、不愉快な自分の世界に、明るい光明がさして来るのである。それほど純粹に画をかく事を楽しみ得るといふ事が、漱石の画の世界の美しさを純粹なものにするのである。

日本文学電子図書館

漱石と画

著 者：小宮豊隆

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石全集(昭和49年版) 附録
岩波書店

昭和50年3月10日 発行

日本文学電子図書館